

KOZMOS

特集・卒論	1
運営委員名簿	4
私のすすめる 一冊の本	5
シリーズ読書論 私の読書方法	6
統計から見た図書館	7
館内だより	8

1980 夏 (No. 50)

特集・卒論

私の卒業論文

小 倉 欣 一
(経済学部教授)

私は、1959年3月早稲田大学第一文学部史学科西洋史専修を卒業しました。卒業論文は、『古ゲルマン農制に関する一考察——「共同体」説と「領主制」説とをめぐって——』と題するもので、400字詰原稿用紙90枚(本文70枚、註20枚)からなっていました。今の目からみれば、実に未熟でお恥かしい作品ですが、それでもこれは、大学生生活の総決算であり、学問の面白さを知り、大学院へ進む決心をした記念碑であるため、研究室から借り出したまま、拙宅に大切に保存しています。

どんな著作もその時代の子であるように、このささやかな論文も、当時の政治や社会のあり方、学界の動向を反映しています。私が大学に入った年には、スターリン批判、六全協といった、その後の学生運動にも大きな影響を及ぼした出来事があり、他方アジア・アフリカ諸国がめざましい台頭をみせていました。そして学界では、世界史の基本法則と民族問題が論じられ、封建制から資本制への移行と共同体論が大きな関心を集めていたのです。私は、学生の自主的サークルである歴史学研究会に加わり、先輩たちと大塚久雄著『共同体の基礎理論』やマルクス著『資本制生産に先行する諸形態』を講読しました。ここから、「ゲルマン的共同体」と封建制の成立という問題に興味

を抱きました。そうすると、もっと本格的な勉強をしなければなりません。三年生になるや、鈴木成高教授、野崎直治講師の中世史概説や特講に出席し、勤勉にノートをとる一方、上原専祿、増田四郎、高橋幸八郎、堀米庸三、世良晃志郎といった学者の著述に接し、さらに独和や羅和辞典と首っ引きで、ドブシュ、リュトゲなどの書物に取り組みました。この点で、同級生にくらべ、かなり早く卒業論文のテーマがきまったといえます。

4年生の夏、旅先の信濃追分で立教大学経済学部の川鍋正敏助手と知り合いになり、秋になってその研究室を訪れました。すると松田智雄教授、鶴川馨助手に紹介され、即座にゼミナールのゲストとして論文の中間報告をするよう約束させられました。約2ヶ月後、必死になってまとめた草稿を読み上げ、さまざまな御教示をいただきました。この時苦しんだおかげで、論文の仕上げは比較的容易でした。私の場合幸いなことに、サークル活動、大学の授業、自分の勉強が、知らず知らずのうちに有機的に結びついていったように思えます。皆さんは、どうでしょうか。最後に、自分が本当に興味と共感を抱くテーマを選ぶ、とだけアドヴァイスしておきます。

特集・卒論

論文作成にあたって

丹 野 朝 栄
(社会学部助教授)

「大学生生活」の最後であり、学生生活の終わりを

飾る4年生は、忙しい学年である。時間的にも、空間的にも、精神的にも、肉体的にも。余程覚悟を決めてないと、「オトソ」から見離され、慌しい3ヶ月、不幸にもあと一年、という事態を招きかねない。

就職にしろ、論文を書くにしろ、その準備は3年生から始まっている。諸々の先輩をみると、3年生の生活の帰趨が、その後の進路、論文の内実を決めているといえる。だからといって、3年を余りにも有効に使ってしまった人に道が閉ざされている訳ではない。

学部・学科によって、「卒論」が必修であったり、選択であったり、無かったり、マチマチである。「卒論」を書かない人でも学生生活の最後の足跡として、形として残すか否かに拘らず、心に期すところがある。まして形として「書く作業」に没頭する人にとっては、就職の心配もあり、相当肚を据えないと、「最後で最初の証明」が、期しているものと離れてしまう危険性を孕んでいるといえる。使い古されたことであるが、計画的に行動することが肝腎である。「就職」に重点を置く時期と、「卒論」に重点を置く時期を設定するのである。この時期は「提出日」により、著しく拘束されている。事の成否を決めるのは、日々の積み重ねである。一週間で論文を書くのは（若干の例外を熟知しているが）不可能に近い。「論文の書き方」等々という本があるが、なかなか旨くゆくものではない。以下簡単に、「卒論」を書き終えるための必要条件を記しておこう。

第一に、問題意識及び卒論の構成を、夏休み以前に、「文章化」（400字詰10枚程度）しておくことが必要である。何を明らかにしようとするのか。そのためには理論研究、実証研究、資料分析等々の、どの方法に重点をおくのか。といった問題を早急に決めなければならない。「動かない」ことにはどのような跡も残らないからである。この場合、自分の課題が従来の研究成果とどんな関係にあるのか、といった位置づけをすることが肝要である。位置づけをする際に、各々の学会で出している学会誌に掲載の諸論文及び研究動向、発表された諸文献・資料、各大学で出している「紀要」が参考になり、図書館に足繁く歩を運ぶこと

が必要となる。第二に必要とする文献・資料の所在を把握することである。このために、大学の図書館のみならず、国会図書館を利用することは勿論、指導教員と緊密な連絡を行うとともに、聴講している講義の担当教員にも積極的に接触することが必要である。第三に、論文作成にあたって、ノート、カードのいづれを利用するにしろ、課題との関連で、どのような意味をもっているのかを明確にするために、カードの利用法、ノートの整理の仕方に工夫を要する。その際、典拠となる資料、引用の発行年度、出版社、ページ数を記入することは勿論、レーニンの『哲学ノート』にならって、「適確だ、3章で使おう」というコメントを記入することも、一つの試みである。

与えられた枚数を大幅に越してしまった。簡単に要約しよう。“早道はなし”“夏休休暇前に、問題意識の整理と論文の構成に頭をひねること”“足繁く、図書館、教員を訪ねること（手ぶらではなく＝自分の問題を持って）”

特集・卒論

卒論状況瞥見

下 村 純 武
(工学部講師)

わが工学部で、卒業論文（学科によっては“卒業研究”と称する科目）を選択制にしようという意見は聞かれない。それかあらぬか、年々600名10名にのぼる学生が、この自主的な学習の総仕上げとしての関門を、割合すんなりと通過する。実際、卒業生の認定を議する3月中旬の教授総会資料に徴しても、卒論の成績不良が第1の理由となって不合格又は認定留保とされる例は極く稀れにしか見当たらないのである。

とは云え、卒論の状況がかくも整備されたものであるのかどうか。勿論、卒論が学生個々の専門的基礎学力だの教員の指導手腕だのの結実するものであることは論を俟たない。以下はただ、卒論の一般的な状況について、多少の感想を差し狭むに如かないことを諒とされたい。

先ず現下の教育システムと学問的な水準を保った卒業研究との係りの問題がある。一般教育を通

じての教養を素地として、専門家として自立するに足る基礎的訓練を施すことを旨とする制度下において、3年次終了時点で、研究論文の調査・機器回路の作製・実験・計算等のスタート・ダッシュをつけることは、必ずしも容易な業ではない。就中、就職戦線を控えた学生にとって、勢い卒論テーマにしても、事務的・実利的な分野への関心が偏って露れることになる。

それからあの学生数、教育・研究経費、施設などの問題である。多くを語ることは場違いとなる。ただ筆者の属する電気工学科について云えば、割当て学生数は1研究室10数名（教員1人当て8、9名）を下回らない。

また、制度上の問題も多い。当学科の場合、“卒論着手資格”を有する学生の希望申出と学科内規に則って配属先が決定される。然し僅々20分程度のガイダンスでは、研究室の全容が学生に判然とする訳ではない。結局、教員への親しみ如何、研究・作業の厳しき如何、などという伝聞や打算から希望先を決めることが多いだろう。

“卒着資格”にしても、要は3年次迄の修得単位数のみで定めた進級ボーダー・ラインのことである。いやしくも研究活動の一端を担う卒論の概念は、教育の機会としての“卒論”の解釈との狭間で、議論を呼ぶことも事実である。ともあれ、真に学業や生活に苦悩をもった学生は、この資格規定の故に、学問上の創造的活動に初めて参入することはもとより、教員や学友と親しく接することのできる機会からも脱落するのである。

問題は問題として、年来の必修科目としての卒論は、カリキュラムの中で不思議とエキリーブルを保つ存在であるから妙なものである。願わくば卒論が芽となって、大学院進学への意欲が助長されれば、いまの大学制度に於ける研究者養成の目的が達成されつつあると考えてよいであろう。

特集・卒論

卒業論文の心得

宮田裕行
(短期大学教授)

「卒業論文の書き方」については、すでに多く

の書物があるので、それを読めばよいのであるが、求めに応じて、思いつくままに少し記しておく。

本学の国語国文学関係の卒論の枚数は、400字詰原稿用紙で、本文30枚以上となっている。従って、この枚数の中に概説書に記されていることや研究史などについて記すスペースも、その必要性も全くないであろう。要は、はじめに、何を、どんな目的で、どんな方法のもとに研究しようとしているかを記したのち、自らの研究成果を論証し、最後にその結論とその価値や今後の課題などについて記せばよいのである。一般の雑誌論文はすべて30枚程度で出来上っており、丁度よい見本となるであろう。

論文は研究の対象に何をを選ぶかによって、その価値はほぼ6割方決ってしまうものであるから、問題点を多く含むものや、未研究分野を対象とし、後に発展性を持ったものが望ましい。そして、研究対象に相対したとき、問題点が脳裏に浮んで来るようであるとよいのであるが、それには、今までの学習により、専門分野についての学問的常識を取得していることが肝要である。作品なり作家なりを、ただ好きであるというだけでは、論文は書けないのである。

その他、論文作成上の留意点について、若干記しておく。

- ① 参考文献リストを作成し、先人にいかなる研究があるかを調べておくこと。これについては『国語表現法』（笠間書院刊）の「論文の書き方」の項に粗方は掲載されている。その他、雑誌の特集号や叢書などの解説や参考文献リストを利用するのもよい。国語学方面では、国語学論説資料並びに索引（1964年以降の国語学専門誌以外の雑誌論文の集成、北辰刊）がある。これらのほか、論文名のあげられていないものに、講座・論文集・単行本などがあるので注意を要する。
- ② 基礎的材料の収集法を承知し、どこにその材料があるかを正確に分類整理しておくこと。それには、調査の順序と方法を間違えぬことと、カードを要領よく取ることである。カードは1枚1件とし、必要事項（見出し、要点又は原

文、書名、筆者名、巻・号・頁・行数、日記は年月日等)を正確に写しておく。

- ③ 作品を通読し、解説や研究書を読み、自分が興味を感じた点、疑問に思う点、感心した点、不満に思う点などをカードに書き込み、このカードを比較することにより、問題点が摘出される。そして先人が全然触れていないこと、論争の種になっていること、先人の説に疑問のあることなどを、種々の書物や資料を駆使し、統計を取ったりして研究を進める。研究はテキストの問題を取り上げてよく、又、文中の一語句、一行の洞察からも論文は書けるのである。
- ④ 論文の構成や章段の組み立てを考えるには、関連の論文を数編読んでみて、その調査研究方法や論証の仕方などを学び、それを自分の論題にふさわしいようにアレンジしたり、他の方法を加えたりして論を進めるとよいであろう。
- ⑤ 引用文は孫引きではなく、原典に当り、正確にすることである。研究書に引用されているものは、しばしば改編されている。論文によっては、わざわざ改編しているものさえもある(例、吉田精一著『自然主義の研究』など)。又、そこに展開されている論自体に誤りの存在することもある。
- ⑥ 終りに、怪しい漢字や仮名遣いは必ず辞書で確かめ、下書きが出来たら一度読み返して若干の手を加え、もし可能なら誰かに一通り読んでもらおうとよい。論文を清書するには、1日15枚乃至20枚位、それに製本日を加えて日程を組むとよいであろう。

以上の過程において、絶えず指導教員の指導を受けるべきことはいうまでもないであろう。

——(卒業)論文・レポートの書き方——

ついでの本

(白山・参考係)

- 論文の書き方——国語・国文学科生のために 1959 至文堂 (816: R) (910.7: A国文研)
- 論文とレポート——英米文学・テーマの考え方 書き方 成田成寿著 1966 八潮出版社 (836.5: NS)
- 卒業論文のテーマと書き方 野町 二著 1964 研究社 (930.7: NS)
- 英文科において卒業論文を書こうとする諸君諸嬢のために 島田謹二著 (白山英文学; 卒業論文特集 1 19

70) 東洋大学白山英文学会 (Z097.93: T)

- 研究レポートのすすめ; 卒論・ゼミ論のまとめ方 杉原四郎他著 1979 有斐閣 (有斐閣新書) (816: SS)
- 論文の書き方 沢田昭夫著 1977 講談社 (学術文庫) (816: SA-2)
- 《論文の書き方》新川正美著 (『書齋の窓』111~114) 1969 有斐閣 (Z051.3: S-10)
- 論文の書き方 清水幾太郎著 1959 岩波書店 (岩波新書) (816: SI)
- 論文・レポートの書き方——構成力・表現力を身につける100のポイント 三木 正著 1978 日本実業出版社 (816: MT)
- 論文・レポートを書く技術——そのルールとポイント 竹俣一雄著 1978 ナツメ社 (ポケット・ブックス) (816: TK)
- 論文・レポートの書き方 八杉竜一、竹内敬人著 1976 明治書院 (作法叢書) (816: YR)
- 新しい論文・レポート・作文の書き方——論文まとめ方の秘法公開 林 太郎著 1972 新星出版社 (816: HT)
- レポート・論文のまとめ方と書き方 宮内克男著 1978 川島書店 (816: MK)
- 事例レポート・論文の書き方 木村時夫著 1979 南雲堂 (816: KT-2)
- 学術論文の技法 斎藤 孝著 1977 日本エディタースクール出版部 (816: ST-2)
- 原稿作法 奥山益朗 1971 東京堂出版 (815.9: OM)
- 悪文の自己診断と治療の実際 永野 賢著 1969 至文堂 (816: NM-2)
- 悪文 新版 岩淵悦太郎編著 1965 日本評論社 (816: IE)

図書館運営委員名簿 (昭和155,56年度)

野村 順一(図書館長)	松岡 八郎(朝霞分館長)
及川 浩(工学部分館長)	藤島 岳(教務部長)
神作 光一(教学部長)	藤川 玄一(文学研究科)
五島 貞次(社会学研究科)	坂田 期雄(法学研究科)
風巻 義孝(経営学研究科)	横山 辰夫(経済学研究科)
安藤 範平(工学研究科)	岡田 愛子(文学部)
小倉 欣一(経済学部)	大島藤太郎(経営学部)
三沢 元次(法学部)	井出 翁(社会学部)
石村 基(工学部)	宮治 弘之(教養課程)
溝口寿美子(短期大学)	山内 四郎(図書館)
小島 浩(図書館)	栗沢 順吉(図書館)
丸山 素子(図書館)	

私のすすめる一冊の本

松 岡 八 郎
(朝霞分館長・法学部教授)

この四月の初め、新学期が始まる直前に、私たちのゼミは熱海で二泊三日の合宿を行った。この合宿ゼミで学生諸君とともに読んだ本は、丸山真男（東京大学名誉教授）著「現代政治の思想と行動」（増補版）（未来社刊）である。

この本は周知のように、わが国における戦後の政治学の輝かしい業績の一つであるといわれており、私自身も幾度も読み、その都度感銘を深くしてきた本であるが、この本をゼミで読むことに決めたのは学生諸君の自発的な意思であった。こうして合宿ゼミでは、それぞれの分担にしたがって報告が行われたが、正直なところ、この本が相当むづかしいこともあって、学生諸君の報告はみな四苦八苦の様子であった。

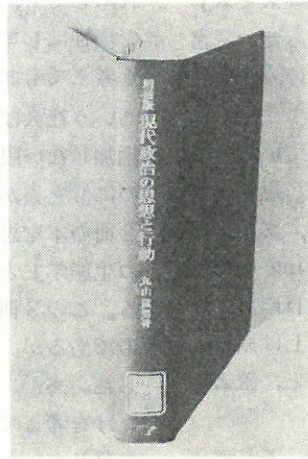
この報告を聞きながら、過ぎ去った若いころの私自身の政治学研究の歩みが思い出された。丸山先生は戦後いち早く、昭和二二年に「科学としての政治学」という論文（上記の本に収められている）を発表されて、戦後の政治学の進むべき方向を指し示めされたが、当時私はこの論文に大いに刺激され、導かれて、政治学への旅に出發したのである。

それ以来、私は丸山先生の書かれた論文にはたえず注意し、読むように心掛けてきたのであるが、やがて昭和三二年にはそれらの主要な論文がまず上下二巻の論文集としてまとめられ、さらに昭和三九年には増補されて、いまの一冊の本として発刊されるにいった。

いまここで、その内容の詳細について紹介する余裕はないが、一点だけあげるとすれば、わが国におけるファシズムの問題を論ずる場合、避けて通ることのできない、いくつかの論文が収められていることはよく知られていることである。

私は政治学の講義の際には、かならずこの本を推薦するのであるが、ただ政治学の領域のみならず、広く人文・社会科学関係の学生諸君にも学ぶべき多くのものを与えてくれるものと確信している。

この四月半ば、はからずも朝霞分館の分館長の職に就くことになり、早速、分館の書庫を見せてもらった。そこにこの本が備えられているのを見出し、非常にうれしかったが、朝霞分館は全体としては残念ながら未完成の図書館である。分館創設以来、わずかに四年にすぎず、飯島前図書館長や犬田前分館長を始め関係図書館員の努力と学生諸君の利用とによって年毎に充実してはきているが、まだまだこれからの図書館であることは否定できない。例えば、学生諸君の勉学のための図書をもっともっとふやさねばならないし、閲覧室や書庫をさらに拡充しなければならぬ。また朝霞校舎において教育し研究しておられる先生方のお役に立つ蔵書や設備の充実も忘れてはならないであろう。このように考えてくると、分館のかかえている課題は山積しているといつてよい



またこれらの問題を解決するためには、現在の分館のスペースでは不足することはいうまでもない。したがってさらにいえば、ぜひ独立棟の図書館が欲しい。

こうして、分館の充実課題は広がっていくばかりであるが、勿論、これらのことが一朝一夕に成るわけではない。目標を高くかかげながら、一步一步足もとをふみしめて、できることから着実に具体化していかなければならないと痛感している。関係各位の積極的な援助と学生諸君の活発な支持を切にお願いしたいと思う。



シリアルズ 読書論

私の読書方法

比 企 三 蔵
(工学部助手)

<乱読派>

私が図書館で借りる本は、専門書以外の本が圧倒的に多い。このためであろうか、「コスモス」に読書について何か書けとの依頼があった。読書方法であるならば書けると思い、自分の読書体験を振り返ってみる。

私はかなりの乱読派であると自認している。常に3~4冊の本を平行して読んでいる。現在読んでいる本を並べると、専門書以外では、ブルーバックスを帰りの電車の中で、「The living earth」を学校で気分転換に、SF小説を日曜日に、さらに純文学を睡眠薬がわり（これはしばしば興奮剤となる）に読んでいる。こうしてみると、読書が生活の一部となっている気がする。

四年生になると履歴書が必要となる。そして、履歴書には趣味の欄があり、読書と書き入れる人も多いであろう（かつては私もそうであった）。しかし、私にとって読書は趣味です、と言ってよいのだろうか。どうもそれだけではない。どのように読んできたのか振り返ってみよう。

<SF小説から人物伝へ>

私が本を読むようになったのは、小学校の5年の時からで、市立の図書館を利用し始めたのは、中学1年の時からである。もっぱらSF小説を読んでいたのを憶えている。最初は、ストーリー展開の面白さにつられ読んでいたものが、何かを考えるための読書へと変わった。例えば、友情について考えた時に、大宰治著「走れメロス」やヘッセ著「デミアン」等を読んだ。そのうち、このような本を読み終へた時、主人公はこれからどのような生活をしてゆくのだろうかと思ひ、ある人物の一生を書いた本を読むようになった。吉川英治著

「新平家物語」では平清盛、パール・バック著「大地」では王大人、中里介山著「大菩薩峠」では机竜之助、司馬遼太郎著「熟えよ剣」では土方歳三の生き方について考えるようになった。このように見てくると、読書は人生に対する知識を高め、知恵を深めるためにしてきたといえる。

<人間と環境の係りあい>

最近、石川英輔著「大江戸神仙伝」を読んだ。これはSF小説で、現代人を江戸時代に孤立無援でいきなり押し込めばどうなるかがテーマである。この中に「江戸は大都会といっても、まだ大自然の中に浮かぶ島のようなものなのだろう。それにしても、これほど美しい自然と人工との調和を犠牲にして得られた、私の時代の便利さは、どう考えてもお粗末だとしか思えなかった。……ああいう社会は、土地、資源、人口などが、無限に増加しない限り、早晚行き詰まるに決まっているのに」と書かれている。この箇所を読んだ時に、2冊の本を思いだした。それは、栗原康著「有限の生態学」と有吉佐和子著「私は忘れない」である。この3冊の本は、何の関係も無しに読んだものであるが、環境問題を考える上でびたりと一致した。また、読書の方法が変わってきている。人間だけを考えて本を読んできたものが、人間と環境の係りあいを考えて読むようになってきた。

水原秋桜子の句に「辛夷咲き善福寺川縷(る)の如し」がある。善福寺川は杉並区の善福寺池を源とする川で、杉並区、中野区を経て神田上水に合流している。江戸時代には上水として使用された川である。現在では、川とは名ばかりで、水は濁り、芥が流れ大きな溝といった感じである。環境を変えるのは人であり、人も環境によって変わるものである。これからも、読書をしていく環境を変えずにいきたいと思っている。

お・し・ら・せ

白山3冊プラス朝霞3冊かりられます
館外貸出は、今まで白山、朝霞両館で3冊までしか借りられませんでした。今年4月から両館とも3冊づつ(卒業論文の場合は5冊)計6冊借りられます。大いに利用して下さい。

(但し、視聴覚資料は除きます)

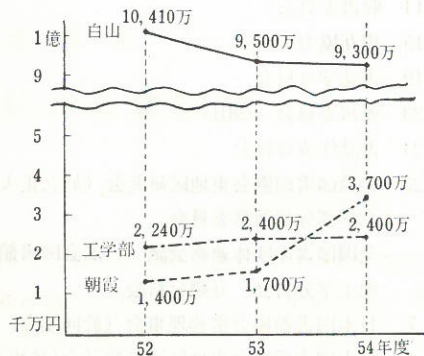
統計から見た図書館—昭利54年度

I 資料の購入 I-1 所蔵数 (昭和55年3月31日現在調べ)

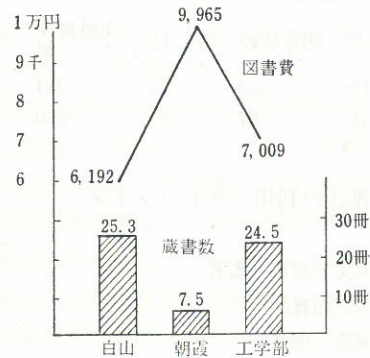
	54年度増加図書数			総所蔵数		
	和	洋	計	和	洋	計
白山	12,079	5,336	17,415	262,013	117,748	379,761
朝霞	8,861	468	9,329	27,106	864	27,970
工学部	2,023	1,492	3,515	49,639	31,242	83,881
計	22,963	7,296	30,259	338,758	152,854	491,612

※ このほか、白山の視聴覚資料が54年度分1,014点受入、総受入点数5,271点あります。

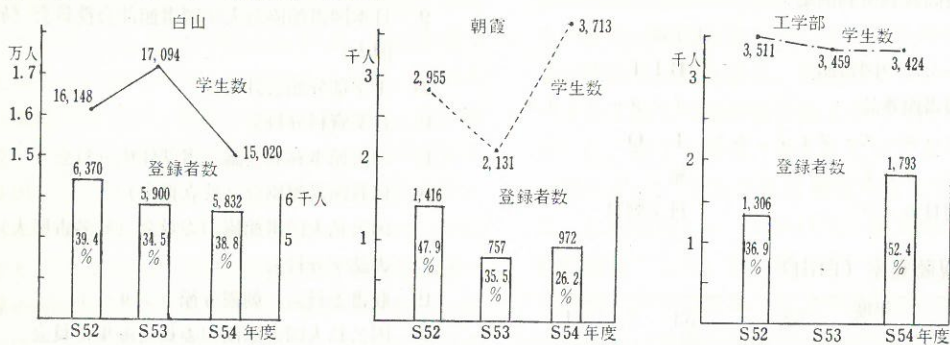
I-2 図書費



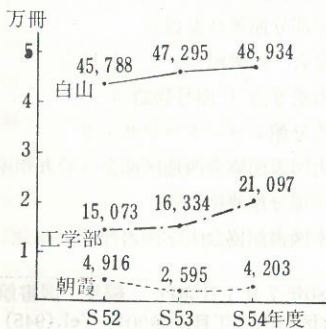
I-3 学生一人あたりの蔵書数・図書費



II 利用 II-1 登録者, 登録率

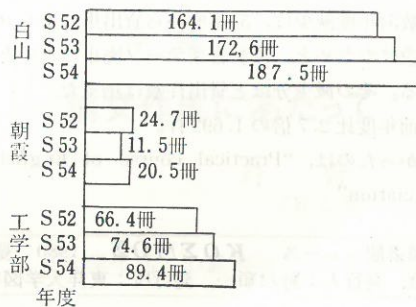


II-2 館外貸出総冊数



※工学部のみ雑誌も含む

II-3 1口平均館外貸出冊数



II-4 学生1人当りの館外貸出冊数

館	年度	52	53	54
白山		2.6冊	2.5冊	3.0冊
朝霞		1.6冊	1.2冊	1.1冊
工学部		3.7冊	4.2冊	5.3冊

II-5 参考質問, 相互協力

(白山) 質問件数4,249件で, 文献調査, 文献所在調査が65%を占めています。あとは事実調査, 利用指導など。

他の図書館への紹介, 文献をとりよせるサービスなど学外との協力は年々ふえています。

昭和54年度	閲覧依頼	受付	文献複製依頼	受付
白山	353	73	314	250
工学部	27	25	570	101

II-6 雑誌の利用ベストファイブ

白山

1. 国文学解釈と鑑賞
2. 図書館雑誌
3. 国語と国文
4. 国文学解釈と教材の研究
5. 最高裁判所判例集

朝霞

1. みんなの図書館
2. 図書館雑誌
3. リーダース・ダイジェスト
4. ジュリスト
5. 朝日カメラ

工学部

- BIT
インターフェイス
I/O
旅
科学朝日

II-7 視聴覚室(白山)

年度	52	53	54
開室日数	138	136	140
利用件数	2,982	3,463	2,576
うち夜間利用		(158)	(208)

※ 利用件数54年度減少は, 54年度から貸出用音楽レコードを設けたためと, 複製音楽テープ廃止のためと思われる。その減少分ほど貸出件数は増えた。

※ 貸出は前年度比2.7倍の1,692件。

一番多かったのは, "Practical course of English pronunciation"

II-8 複写枚数

館	年度	52	53	54
白山		301,306	338,038	372,418
朝霞		24,837	14,669	36,235
工学部		96,000	95,262	88,592

館内だより (55年4月~6月9日)

4. 1 野村順一館長就任, 松岡八郎朝霞分館長就任
- 9 国公私大図書館協力委員会 機関誌編集委員会 (於東京大)
- 14 収書委員会
- 15 相互協力分科会
- 19 書誌学分科会
- 23 運営委員会 (白山)
- 24 書誌作成分科会
- 25 仏教図書館協会東地区研究会 (於立正大) 工学部分館運営委員会 全国図書館団体連絡会議 (於国会図書館) 理工学分科会, 分類分科会
5. 7 日本図書館協会常務理事会 (於同協会)
- 8 私大図書館協会東地区連絡懇話会 (於雨水会館) 図書館会計監査
- 9 日本図書館協会大学図書館部会役員会 (於横浜国大)
- 10 工学部分館会計監査
- 12 音楽資料分科会
- 15 図書館事務局会議, 書誌作成分科会
- 16 仏教図書館協会 (於立正大) 国公私大図書館協力委員会 (於名古屋大)
- 17 書誌学分科会
- 19 収書委員会, 朝霞分館コンサート
- 20 国公私大図書館協力委員会編集委員会
- 21 分類分科会, 図書館事務局会議 運営委員会
- 22 工学部分館運営委員会
- 28 連絡会 図書館サービス分科会 白山映画会 (「雨月物語」)
- 29 朝霞分館レコードコンサート
- 30 私大図書館協会西地区部会 (於九州産業大) 工学部分館連絡会
6. 3 日本図書館協会大学図書館部会総会